

〔課題演習抄録〕

主体的に書く力を育てる国語科学習指導法の工夫
-読みを深める「書く」活動を通して-

脇 田 夢 子

Yumeko WAKITA

福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：主体的に書く、「書くこと」と「読むこと」の関連、第三の書く

1 研究の目的

「書くこと」において、「読む」活動と関連させた言語活動を取り入れ、書くことへの主体性を高める指導を研究する。そのため、作品としての「書く」ではなく、自分の考えを記録したり要約したりする「書くこと」の学習を行い、日常の言語機能としての「書くこと」を取り入れた授業実践を行う。本研究では、書く活動と読む活動を関連させ、読みが深まると同時に書くことに対する抵抗感を減らし、主体的に書く能力を高めることを目的としている。

2 研究の計画

4～6月	先行研究の検討
7～9月	授業づくり①・教材研究
10～11月	授業づくり②・教材研究
12月	授業実践・授業考察、まとめ (平成30年12月、宗像市内T中学校第1学年、4クラス、生徒数111名)

3 研究の内容

(1) 先行研究

ア書くことに関する課題

全国学力学習状況調査(2017)においては、全国的な課題として「書くこと」に関する課題が挙げられ、特に「表現の仕方について捉え、自分の考えを書くことができるかどうか見る問題」の平均正答率が低い。従来から、書くことに関して、伝えたい事柄や根拠を明確にして自分の考えを書くこと(記述)に課題があると指摘されている。その

うえ、無回答率に関しても、記号で答えるような「選択」する問題に比べ、「抜き出す」問題や「書き直す」問題、「自分の考えを書く」、「考えたこと」の理由を書く」問題の方が、無回答率が大幅に高い。つまり、自分の意見を言葉で表現することや「書くこと」に抵抗感をもつ生徒が多いことが課題である。福岡県でも、中学校国語B問題の「表現の仕方について捉え、自分の考えを書くこと」の力が不十分であることが指摘されている。(福岡県 39.3% 全国 41.4%) このようなことから、生徒の「書くこと」への抵抗感を減らす授業改善を考えていくことは意義深い。

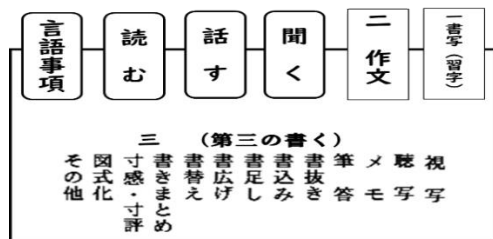
イ国語科における「書く」の分類

国語科では、「書く」といってもその活動には様々な意味合いがある。例えば、漢字を書く、書写といった、いわゆる言語事項的な書く活動や、作文を書く、詩を書く、小説を書くといった表現活動としての書く活動がある。他にも、記録する、筆記する、視写する、メモする等の書く活動が場面にあわせて行われている。神野(2016)は、一読後に初発の感想を書いたり、繰り返し読んだ後に主題や要旨を書いたり(まとめたり)する活動を例に挙げ「文章を読む活動においてなされる書く活動もある」としている。さらには、個々の読みを記録することや、自分の読みを他者と交流するために、書く活動が行われることも含めて「これらは文章を読むための書く活動である。その際、書くことによって、読みがさらに深まることがある。」と主張している。

ウ書くことと読むことの関連

表1は青木(1986)が国語科における書くことについて述べるなかで、「第三の書く」を読みの学習に位置づけたものである。「第三の書く」に分類される書く活動は、「書く」を生かした読むことの方

法であり、その有効性を検証している。つまり、書く活動を取り入れることによって、読むことの授業の活性化を図ったのである。



(表1 書くことの三態 『第三の書く』p.15一部改)

(2) 実践授業の概要と考察

ア実践授業の概要

今回の実践授業では、中学1年生を対象に「書くこと」に関する力のうち、全国学力学習状況調査(2017)で特に課題がある指摘された「表現の仕方について捉え、自分の考えを書くこと」の力に重点を置いた。自分の考えを書くために、前述した「第三の書く」のうち「書替え」を用いて、詩にもう一つの題名をつける活動を設定した。

- ・単元「もう一つの題名を考えよう」(全2時間)
- ・ねらい「詩の主題を考え、詩にもう一つの題名を付ける学習を通して、自分の意見を短く表現することができる」

導入:①詩についての関心・興味を深めるため、まど・みちお「ぞうさん」の詩とその主題を紹介する。②小学校第3学年で扱う金子みすゞ「私と小鳥と鈴と」に教師がもう一つの題名をつけ、その理由を200字以内でまとめたモデルを提示する。

展開:①個人活動に入る前に、共通教材(田中章義「笑うこと」)を用いて全体で意見の共有を行う。②4つの詩(まど・みちお「朝が来ると」高階杞一「約束」杉山平一「下降」中桐雅夫「創造力」)を読む。その中からお気に入りの詩を2つ選び、もう一つの題名をつける。③個人の題名を持ち寄って3~5人の班で交流を行う。④個人の意見を再構築し、最終的に選んだ詩に題名をつける。

終末:①詩につけた題名の理由と自分の意見を180字以上200字以内の意見文としてまとめる。②導入で紹介した教師のモデルを再び示すとともに、書き方の例を与え、自分の意見を書くためのポイントと条件を確認する。

イ授業の考察

生徒の記述プリントより、全員の生徒がもう一つの題名を考えて、書くことができていた。プリントには、「書抜き」の欄と「メモ」の欄を設けていた。そこに詩の一部を抜き出し、個人で矢印を書いたり、絵を描いたりしていたことから、書抜きやメモが詩のイメージを膨らませていくことや

詩の読み取りに効果的だったと推測できる。特にメモの欄には、詩の表現に着目して、問いかけが続く部分を抜き出し、主張が強調されていることを読み取ったり、詩を時系列に切り取って様子を絵で記録していたり、読みながら感じたことを図式化していたりと、頭で考えたことを視覚化することで、自分なりの題名を考え書くことにつながったのだと考える。

4 成果と課題

成果としては、第一に全員の生徒が詩の主題をふまえて、もう一つの題名をつけるという「書替え」ができていたことである。限られた時間の中で、全員の生徒が詩の題名とその理由を書くことができていた。また、題名を書くことに対して、「作者と自分の考えたことを対比できて面白い」や「自分が詩に対して思ったことをまとめられるのでおもしろかった」という意見が見られた。さらに、生徒がつけた題名は、詩の中の言葉だけでなく、新しく言葉を組み合わせたものなどの工夫が見られた。このことから、「書替え」によって、詩の主題を読み取り、自分の考えや思いをもつことができていたといえる。

次に手立てについては、事後のアンケートより書き方のモデルや例があったことで「かなり書きやすかった」「分からなくなったときにあったから助かった」「見ながらだと書くことができた」という肯定的な意見が多く、教師のモデルの提示は意見文を書くときに有効であると分かった。

一方で、生徒の15%が、意見文を書くことに対して難しいと感じたことから、主体的に書く力を育てるためには課題がある。難しさを感じた理由としては、「詩の意味を考えないといけないから200字で書くのは難しい」という意見や「作者の思いを読み解くのが難しいから上手く書けなかった」「考えるのに時間がかかる」という意見が多かったため、読むことへの手立てをより充実させる必要がある。

主な引用・参考文献

- 青木幹勇 1986 『第三の書く』国土社
- 福岡県教育庁 2017 『全国学力・学習状況調査及び福岡県学力調査結果報告書』
- 神野正喜 2016 「書く活動を取り入れた読むことの学習指導」広島女学院大学研究紀要第2号
- 文部科学省 2017 『中学校学習指導要領解説国語編』